

The Townscape remains in people's mind

SATO Masaru
Faculty of Design, Kyushu University
President, Asia Townscape Design Society

1. アジア的な景観

景観には、国特有の価値観が反映されている。必ずしもどこかが優れ、どこかが劣っているというものではない。政府や国民が望む姿が反映されており、欧米が美しいとか、屋外広告物の氾濫が問題であるとか、短絡的に結論づけてはいけない。良かれ悪しかれ、現在の景観は、これまでのその地域の人々が望んできた結果なのである。この本質を無視して景観問題の研究はあり得ない。

以前、授業で、スイスのベルンの街並と、広告物が氾濫している渋谷の街並を比較し、好きな方に手を挙げさせたところ、いずれも共感を持たないという結果になった。2階までを渋谷、3階以上をベルンにしたシミュレーションが、多くの学生の支持を受けた。長い間ベルンを美しいと思ってきた先入観に疑問が芽生えた。講演の度に聞いてみると、それは学生ばかりでなく一般の人もそうであることがわかった。

そこから、アジアの人々は、煩雑な景観や賑わいを好ましいものとして評価しているのではないかと考えるようになった。すぐれた事例を知らないから、あるいは発展途上にあるから、という理由からではなく、積極的に煩雑な景観を望んでいるのではないか。そのことを仮に前提とすると、従来の欧米を範としてきた一般的な景観指導の方法には、アジア的な視点が欠けていたことになる。

そこで本学会は、窯業系の企業や行政、大学教員等が集まってつくっていた九州景観材料研究会を母体として、特にアジア的な価値観の解明と、それを今後の景観づくりに活かしていくことを目的として5年前に発足した。はじめから国際学会であることをめざし、日本と各国とを交互に開催するものとし、日本、韓国、日本と開催し、この度中国で開催することになった。韓国では、日本に続いて景観法の成立をめざしているところであり、景観に関する議論が盛り上がった。国会がセミナーを企画したり、ソ

ウル放送が1時間特別番組をつくるなど、景観への関心が高まっている。一方、2007年の春の大会では、上海の活動が発表されて注目されたところであり、昨今の中国の著しい発展には誰もが注目している。しかし、景観問題についてはまだ基盤が薄く、大学、行政、企業共に、人材の育成が急がれる。

2. 景観の連続性と地域性

景観問題は、1970年代に、交通問題、ランドスケープ、デザインの3つの観点から捉えられるようになった。

交通問題に関しては、1974年にOECDがまとめた“Streets for People”が注目され、世界的に歩行者のための空間の確保が進められた。

ランドスケープやデザインに関しては、1964年に出版されたGarrett Eckboの“Urban Landscape Design”の序には、「そこには連続性とアクセント、まとも中の変化、予期せぬ驚きがなければならない」と書かれている。Kevin Lynchは1976年に出版した“Managing the Sense of a Region”で、「環境の質は地域の尺度で計画するべきだ」と主張している。ここには「連続性」と「地域性」という、景観に関するふたつの視点が指摘されている。

この2点において企業と公共の利害が対立してきた。企業にとっては、自分だけが注目されることが望ましい。また、世界あるいは全国的に一貫したアイデンティティを確立することが望ましい。これに対して住民は、地域の自然や建物等との連続性を重視し、地域の特性を尊重してほしいと考える。行政は、中・長期的な展望に立って、地域があるべき方向を模索しなければならない。

3. 近景・中景・遠景

日本の景観は豊かである。日本の市町村の地域の特徴を表現するスローガンには、ほとんど例外なく、「水と緑に恵まれた○○○」と謳われている。田畑、森、川、海、山に囲まれた農漁村や都市の姿を思い浮かべることができる。日本は島国で起伏に富み、